



男らしいものとセンチメンタルなものの狭間で The Plastic Age におけるサウンドスケープ

著者	大野 瀬津子
雑誌名	九州工業大学研究報告. 人文・社会科学
巻	63
ページ	1-11
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	Wavering between the Masculine and the Sentimental Soundscape in The Plastic Age
URL	http://hdl.handle.net/10228/5336

男らしいものとセンチメンタルなものの狭間で — *The Plastic Age* におけるサウンドスケープ —

(平成26年11月28日 受理)

人間科学系 大野 瀬津子

Wavering between the Masculine and the Sentimental — Soundscape in *The Plastic Age* —

(Received November 28, 2014)

Kyushu Institute of Technology Setsuko OHNO

序

小説家・批評家で大学の教鞭も執っていた Percy Marks が1924年に発表した *The Plastic Age* は、主人公の白人男子大学生 Hugh が学部4年間を通じて葛藤し続ける姿を描いた大学小説である。¹⁾ この作品は、1924年の年間ベストセラーの2位を飾り、翌1925年には映画化されるほどの反響を呼んだ (Hackett 137)。出版当初、この小説は、学生たちからは人気を博したものの、親や教育機関からは、ふしだらな若者文化を描いた「卑猥な」小説として酷評された (“Brown University’s Reward for Marks,” C5; Lipke 17)。²⁾ 最近では、Susan Ikenberry が、ペッティングなど「道徳上危険な」(morally dangerous) 当時の学生生活を描いた画期的な大学小説の一つとして *The Plastic Age* を評価している (60)。また諏訪部浩一は、性的に奔放な「新しい女」の登場に不安を覚えた男たちが「ヴィクトリアン・マザー」を発見していく身振りをこの作品に読み取っている (157-59)。出版当時から現在に至るまで、*The Plastic Age* は、1920年代の若者文化、特にセクシュアリティに関わる言説をそのまま反映する作品として扱われてきたといえる。

歴史的見地に立つと、当時の大学は、男らしさの言説の生産拠点だった。アメリカの大学の歴史を規律・男らしさ・アメリカン・フットボールの三者関係から概括した Brian M. Ingrassia は、アメリカ人が社会変化に対応すべく大学を創設し、「男の美徳」(manly virtue) と「規律」(discipline) を奨励しようとした、と論じている (6)。ここに明らかのように、大学の揺籃期の19世紀前半から、「規律」は「男の美徳」と不可分であり、大学が男の美徳たる規律の養成を担っていたのである。「規律」の意味するところは時代に応じて変遷するが、Ingrassia によると、1920年代、規律は軍人の一属性とされていた (293)。第一次世界大戦の影響もあり、大学は、青年たちに軍事的規律を教える「軍事訓練校」の様相を呈していたのである (Ingrassia 290)。Ingrassia によれば、当時の大学で軍事的規律の鍛錬を中心的に引き受けていたのは、アメリカン・フットボールである (289-298)。アメフトは、1920年代の若者たちが軍事的規律を学び、軍人のような男らしさを獲得す

る場だった。重要なのは、第1節で考察するように、当時大学、さらには国を上げての一大イベントへと成長したアメフト大学対抗戦において、観客もまた、声援や校歌斉唱を通じて規律化されていた、という点である。規律の順守が男の美德とされた当時の概念に照らせば、統制のとれた声援や校歌斉唱が響くアメフトのスタジアムは、男らしい音響空間の代表格だったといえる。

“roaring twenties”と称される1920年代アメリカは、轟き鳴り響く音を示唆する *roaring* という用語通り、国民が都市化や科学技術の発達による前代未聞の様々な音に晒された時代だった。とりわけラジオ放送の開始は、国民を “sound conscious” にした、と1930年の新聞記事は伝えている (Thompson 115; “When Radio Answered a Call” 12)。そんな音に意識的な時代に書かれた *The Plastic Age* は、音、とりわけ人間の声に意識的なテキストであるように見受けられる。

The Plastic Age に描かれるサンフォード大学では、声の周囲に男らしい音響空間が形成される。しかし同時に、それとは相容れない世界も、声の周りに発生する。主人公 Hugh の友人 Norry が語る美しい詩や音楽への感傷の言葉で満ちあふれた世界、そして Hugh が別の友人 Winsor との歩行中に耳にする美しい詩の朗読によって構築される世界、いわばセンチメンタルな音響空間である。本発表では、同時代の男らしい音響空間について検証した上で、男らしい音響空間とセンチメンタルな音響空間に対する Hugh の関わり方をそれぞれ考察する。そして、両世界の間を往来し続ける Hugh の揺れ動きを、彼の聴覚的な感受性 (auditory sensitivity) として提示するとともに、男らしさの鋳型にも収まらず、センチメンタルな紐帯にも縛られない、この小説のスタンスの表れとして評価したい。

1. 音響の規律

アメフトで鍛えられる男らしい軍事的規律とは、どのような規律のことを指していたのか。また観客側は、どのように規律化されていたのか。*Football without a Coach* は、「アメフトの父」とされる Walter Camp (Ingrassia 293) が、アメフトのチームの指導者を目指す人々に向けて1920年に出版したアメフト・マニュアルである。Camp はこのマニュアルで、選手たちに身体面での規律を守らせることの必要性を説いた後、最終章で、身体面・物質面で劣ったチームが勝つこともある、と指摘する。Camp はその状況を戦争と重ね合わせ、なぜ身体面・物質面で優れた側が負けるのか、その理由を語る。彼によれば、“machinery”——すなわち戦闘員の数や軍勢の配列、銃や装備など——で優勢な側が負けるのは、「士気」(morale)、アメフトでいえば「チーム・スピリット」に欠けていたからだ、ということになる (166)。身体・装備を合わせたフィジカル面だけでは戦いに勝てない。勝利を呼び込むには、フィジカル面に加え、「士気」や「チーム・スピリット」のようなメタフィジカルな精神性が不可欠だ、というわけである。

Camp は、チーム・スピリットを作り上げるのは、「ハーモニー」だ、と考えているようだ。彼によると、ハーモニーは、チーム一丸となって「一つの理想」(a common ideal)

を描く、という身も震えるような感情から湧き上がるものであり、結果として、勝つために最後の力を振り絞ろうとする選手たちの決意をもたらす(167)。**Camp**は、倒置構文を用い、どこでハーモニーが生まれるかを強調する。「そこ、選手が踏みしめていたあのフィールドのライン (gridiron lines) 上にこそ、ハーモニーの精神が注ぎ込まれた (infused) チームが、かがんで身構えている (crouch) のだ」(167)。“gridiron lines”とは、競技場のフィールドに一定のヤード毎に引かれた何本もの白線のことである。“crouch”は、プレイ開始の際、選手が白線に従って所定の位置についてかがむ動作を指すと考えられる。つまり**Camp**は、選手たちが戦闘に備えるフィールドのなかにおいてだけハーモニーが生まれることを強調しているのである。また、“infuse”という表現から類推するに、ハーモニーは、身体の容物のなかに注ぎ込まれ、身体を精神的なもので満たしていく。勝利に不可欠なチーム・スピリットは、バラバラの肉体を貫く目に見えないハーモニーという精神的なものから形成されている、というのが**Camp**の考えである。

選手たちのチーム・スピリットはそうだとし、スタジアムの観客たちはどうだったのか。当時アメフトは、やるスポーツとしてはもちろん、観るスポーツとしても国民的盛り上がりを見せていた。1928年の大学論において Robert Cooley Angell は、プレイヤーでない大半の学生にとっても、アメフトが大学生活の「ハイライト」(high points)であったことを明らかにしている(105)。Angellによれば、特に大学対抗戦は人気が高く、名門大学同士の対決ともなれば、卒業生や一般市民も含む、実に8万人もの観客がスタジアムに詰めかけたという(106-7)。

観客たちをつなぐもの、それは声だ。1922年に発表した大学を批判するエッセーのなかで、Upton Sinclair は、大多数の学生はスポーツのイベントなどで「声帯」(vocal cords)を使うだけで、と大学スポーツのあり方を揶揄している(370)。しかし翻って、声帯は、身体という目に見えるものの内側から、声という目に見えない音を身体の外側へと生み出す器官であり、ゆえに身体的なものと精神的なものを切り結ぶ結節点ともなる。

実際に、1925年11月15日付けの *Boston Daily Globe* の記事、“Cheers of Spectators May Not Make Sense But They Certainly Help Team Down on Field”を検証してみよう。この記事は、チア・リーダーによって「組織化された声援」(organized cheering)と校歌斉唱のもつ威力について論じたものである(A59)。³⁾ この記事では、「組織化された声援」(organized cheer)の方が「各々の勝手な拍手や歓声」(spontaneous applause)よりもパワーをもつ、という主張がなされている(A59)。理由として記事が挙げるのが、「一体感」(unanimity)の有無である(A59)。“unanimity”という単語は、ラテン語の“unanimus”を語源とし、“unas”は“one”を、“animus”は“mind”を意味する。つまり、“one mind”、「ひとつの精神」である。ただの観客が発する気ままな歓声は、野次・口笛・雑多な叫びなどに「分かれて」(“divide”して)おり、ひとつの精神性というものに欠ける。他方、チア・リーダーの掛け声に合わせて統率された声は、観客たちの身体を「ひとつの精神」で結びつけ、身体を超えた目に見えないものへと昇華していく力をもつ、と記事はいつている。先述したように、選手同士をつなぐチーム・スピリットはハーモニーから形成されていたが、組織的声援は、まさしく声のハーモニーによって、観客を戦うチームに変える。

記事は、校歌の斉唱にも同様の作用が見られるとし、こう述べる。校歌の歌詞内容が実際の試合と合致しないとしても、校歌斉唱によってもたらされる意味はいつも一緒、つまり「『君たちチームには、我々がついている。君たちに勝って欲しい。それ行け、勝つのだ!』」というメッセージを発するのだ、と記事は指摘する (A59)。組織的声援と同じく、校歌斉唱も観客をチームにする作用があるわけである。しかしそれ以上に重要なのは、群衆の心が歌詞で表される世界には向けられておらず、目の前のフィールドで戦っている母校のチームをひたすら志向している、との指摘だろう (A59)。スタンドから発せられる声は観客同士のハーモニーをもたすだけでなく、フィールドで戦う選手たちのチーム・スピリットともハーモニーを奏で、観客の心も選手の心もフィールドという場所の中心へと集結させる求心力をもっている、といえる。

以上より、組織的声援や校歌斉唱が鳴り響くスタジアムに代表される「男らしい音響空間」には、次のような二つの特徴があることが判明した。第一に、声を出す群衆同士が「ひとつの精神」で結ばれること。第二に、声を合わせることで生まれる「ひとつの精神」は、人々をひとつの場へと収斂させる求心力をもっていることである。

2. *The Plastic Age*における音響の規律

小説の舞台となる架空のサンフォード大学は、同時代の大学の例に漏れず、アスリート、わけでもアメフトが中心的人気を誇るホモソーシャルな共同体である (58, 68, 128)。シーズン中に、アメフトのチームを鼓舞するために行われる「決起集会」(rallies) の一場面では、学生たちが、アメフトのチームが滞在するフラタニティ・ハウスへ、次に競技場へと向かって行進していく様子が活写される (53)。冒頭、ある男子学生たちの一団が「行進! 行進!」(“Peerade, peerade!”) と叫びながら、寮かフラタニティ・ハウスから飛び出してくると、たちまち、「聴こえる範囲内にいる全員」(every one within hearing) がその集団へと突進し、「4列に整列」(line up in fours) し、「腕と腕を組んで」(arm in arm)、踊り、校歌を斉唱しながらキャンパス中を周り始めたものだ、とある (53)。ここでは、「行進! 行進!」という中心となる掛け声が、その声の行き渡る範囲にいる学生たちの身体行動を、まるで軍隊の行進のように規律化することが示されている。しかし学生たちは、単に機械化された身体的存在であるにはとどまらない。彼らは、身体行動、そして校歌斉唱で声を合わせつつ、「一つの目的を心に抱いている」(keeping one goal in mind) からだ。彼らの規律化された身体は、目に見えない精神的なもので結ばれている。しかも、彼らが共通して胸に抱く目的とは、キャンパス中を練り歩くこの音響共同体の中心、すなわちフラタニティ・ハウスに滞在中のアメフト選手を鼓舞することに他ならない (53)。こうした決起集会には、学生たちの心をアメフト・チームという共同体の中心に向かってまとめあげる音響的求心性を見て取ることができる。したがって、決起集会は、当時のアメフト文化の理想を反映している、とひとまずいえる。

アメフトは一種の祭りであり、非日常の世界である。しかし主人公の Hugh は、日常においても、同様の音響性に吸い寄せられる。その場となるのが、男子学生たちの秘密組織、

フラタニティだ。アメフト選手がシーズン中に滞在する場がフラタニティ・ハウスであることから、両者のつながりの強さは明らかだろう。

1年生の後期、主人公のHughは、ルーム・メイトのCarlとともにNu Deltaというフラタニティのイニシエーションの儀式に参加する。入会の儀式の夜、会場となるヌ・デルタ・ハウスは「奇妙にも静まり返って」(strangely quiet) おり、「茶化し」(levity) が厳しく禁止されて」いる(91)。沈黙によって、厳粛な気持ちになるよう、無言の統制が敷かれている。参加者たちの厳粛な気持ちの行き先として意図されているのは、フラタニティ・ハウスのなかでも、儀式が行われる空間だろう。事実、新入生たちは「山羊の部屋」(goat room) に向かって「行進」(marched) する(91)。

しかし、新入生たちの心が儀礼的空間の中心に向かってひとつになっているかといえ、そういうわけではない。「山羊の部屋」は、部長とアシスタントたちによる「長いスピーチ」が響く音響空間となるが、Hughのブラザーたちの多くは、「あからさまに退屈して」(openly bored) いるからだ(91)。本来、執行部のスピーチは、そこで話を聞いている参加者たちの精神を一つにまとめる役割をもつはずであるが、実際に発せられる部長たちの声は、もはや求心力を失っているといわざるを得ない。儀式の終わりには、メンバー全員がフラタニティ・ソングを歌いながら「2列に並んで行進し」て階段を降りる——つまり声と身体行動を揃える——わけだが、肝心の彼らの反応については、テキストは何も語らない(92)。大多数が儀式でのスピーチにあからさまに退屈していたことに鑑みると、彼らが精神的なもので結びついていった可能性は極めて低いだろう。掛け声に皆が反応して「ひとつの目的」を胸に行進していたアメフトの決起集会と比べると、Nu Deltaの儀式では、声の求心的役割が機能しなくなっていると考えられる。ただし、無言の強制力や、行進、校歌斉唱、執行部のスピーチなどの慣習が残っているフラタニティは、形骸化した音響空間、とでもいうのが適当かもしれない。

実のところ、アメフトもまた、当時理想とされたチーム・スピリットを純粹に体現したものとして描かれているわけではない。ライバル大学とのビッグ・マッチ開始直前、スタンドでは、両大学の応援団が声援と校歌斉唱を交互に行う。声援は「あまり良くなく」、歌にいたっては「もっとひどい」有様(64)。やたらと大音響の「ノイズ」が鳴り響く(64)。しかし、応援団が気にかけるのは、まさしく「ノイズ」が轟いているかどうか、の一点だけ(64)。単なる「ノイズ」へと堕した応援にハーモニーを聞き取ることは、もはや不可能だろう。

おまけに、サンフォード大がゴールを決めた瞬間、応援席は「尋常ならざる熱狂的な行動」(extraordinarily active lunatics) のるつぼと化す(65)。女たちは手や旗を振りながら「金切り声を上げ」(shrieked)、男たちはスタンドを「跳ね回って」(danced up and down)「わめき散らし」(yelled)、互いの背中を叩きあったり、荒々しく抱き合ったりする(65)。チア・リーダーが秩序を取り戻そうと、トンボ返りをして合図するも、熱狂的な応援で力を使い果たした多くの学生たちは、弱々しく手を振って反応するのがせいぜいのところ。「声も出ない」(voiceless) 状態になってしまっている(66)。好き勝手に振る舞い声を枯らした挙句、その声すら失った観客たちには、フラタニティにはかろうじに残っていた身体的規律すら働かない。そこにはもう、蜂の巣をつついたような狂騒し

かない。もう一つ、この狂騒空間において、女性の多くが知らない男性からキスされ、それを拒むこともしない、つまり性モラルが乱れていることは、銘記しておく必要があるだろう。

アメフトとフラタニティに代表される集団文化の失墜が、最も顕著に表れる場面がある。フラタニティの儀礼的關係を続ける Hugh と Carl は、「腕と腕を組んで」(arm in arm) 郊外の町ヘイスティングスを酩酊状態で歩いている。⁴⁾ その後、町の中心部に出た二人は、通り過ぎりの売春婦二人に声をかけ、交渉が成立する。しかし、Hugh が女性の一人の腕をとったその瞬間、予想外のことが起こる。「誰かが Hugh の『手首』をつかみ、彼を動けなくした」とある (116)。Hugh の「手首」をつかんだのは、偶然通りかかったアメフト部キャプテンの Harry で、彼は Hugh の性的純潔を守ろうと彼を制したのだった。この後、Carl が両脇から売春婦たちに「『腕』を取られ」(took … by arm) 歩き去っていくのに対し、Hugh は Harry に「『腕』を掴まれたまま」(took … by the arm)、大学へと歩いて戻る (117)。片や売春婦、片やアメフト部のキャプテンに腕を取られ、逆方向へと分岐していく二人の姿が予兆するように、この後、売春婦から移された病気が原因で、Carl は退学を余儀なくされ、Hugh は大学生活を続けていく。こうした展開を踏まえると、通りで Hugh の手首を掴んだ Harry の手は、Hugh と Carl のフラタニティに由来する結びつきを引き離し、肉欲に堕した世界から Hugh を遠ざけ、Hugh を健全な精神世界にとめおこうとする、アメフトを代表する男らしさの救いの手であるように見える。しかし、Hugh を導くその Harry の手そのものが、実は汚れている。というのも、後で判明する通り、Harry は買春の常連で、その日も自ら女を買おうと町をうろついていたからだ。つまり Harry の手は、Hugh を正しい道へと導く手であると同時に売春婦をつかむ手であり、肉欲にまみれた手なのである。Harry の手は、純粋な精神世界の理想は認識しながらも、肉体的誘惑に勝てないアメフト文化そのもののアンビバレンスを体現している、といってもいいだろう。実際、サンフォード大のアメフト文化は、みんなの精神を一つにする求心性のある理想的な音響空間を残しているかと思えば、声や身体的規律が働かず、性モラルが乱れた音響空間も抱え込んでおり、純粋な精神の世界と穢れた肉体の世界が表裏一体となっている。フラタニティの場合はもっと単純で、基本的に精神性が失われた世界である。現に、フラタニティ・ダンスは、ペッティング・パーティーの様相を呈し、性モラルなき音響空間と化している。アメフトもフラタニティも、程度の差はあれ、「ひとつの精神」を目指す心の純粋さ、そして身体の純潔をも失いつつある世界なのだ。したがって、冒頭で紹介した *The Plastic Age* に付きまとう卑猥さ、スキャンダル、セクシュアルな言説は、高尚な精神・モラルの瓦解に向けられており、それはアメフトやフラタニティのような集団の腐敗に集約されている、といえるだろう。

3. *The Plastic Age* における声の感傷

損なわれたアメフトやフラタニティの代わりに、純粋な精神的世界として描かれているのが、センチメンタルな音響空間である。買春騒動と相前後して、Hugh は、別のフラ

タニティの学生や、フラタニティに所属していない学生と付き合い始める。こうした学生たちの周りに立ち現れる音響空間は、アメフトの決起集会やフラタニティの入会の儀式のそれとは、随分異なる。

Hughがとりわけ親しくなるのは、「女の子のような外見」(effeminate in appearance)で「静かな低い声」(a low quiet voice)をもつ、Norryという名の、一つ年下の男子学生である(135)。2年生の春、HughはNorryと、度々田舎への散歩に出掛ける(134)。ただし、散歩のシーンといっても、二人が歩く描写はほとんどなく、場面の大半はNorryの台詞で占められている。彼らが散歩する森は、Norryの話し声が充満する音響的な空間だといえるだろう。⁵⁾

最初Norryは、「草地に仰向けに寝転んで雲たちを見ながら、自分がそのなかでも大きなやつの上に腰掛け、『天国まですいすいと漕いで行く』(sailing away to heaven)のを想像するのが好きだ」と語る(135)。ここには、今自分のいる場所から離れ、天空へと駆け上がっていくNorryの想像力が表れている。重要なのは、雲を見るときと同じく、ヴァイオリンの音を聴くときも、Norryが同じような想像を巡らせる点である。彼は、ヴァイオリンを弾き終えると涙があふれており、「あたかも自分が『どこか素晴らしい場所』(some wonderful place)に行っていたかのように感じ、戻って来たくないのだ」と話す(135)。この直後に、Norryは、ヴァイオリンを演奏するときに限らず、「美しい音楽」(beautiful music)や詩にも涙が出るのだ、と語っている(135)。こうした告白から、美しい音を耳にすると現実的な場所の感覚を失い想像の彼方へと浮遊していく、極めてセンチメンタルなNorryの聴覚的感性が浮かび上がる。

しかし、美しい音楽へのNorryの聴覚的感性は、醜い音に対しては完全に閉ざされる。Norryは、仲間が女性に関する「卑猥な話」(dirty stories)をするのを聞くのは嫌だ」と断言している(136)。性的な雑談は、彼にとって醜いものの範疇に入るのであり、美しい音から成る彼の純潔な精神世界を汚すノイズに他ならない。ここで、第2節で論じたアメフト、フラタニティの腐敗への批判を聞き取ることは容易い。異質なもののや肉体性を嫌うNorryの純粹さは、身体の昇華に向かうアメフト本来の理想に近いといえるかもしれない。

ただし、美しい音色を聴くと心が現実の場所から遠ざかっていくNorryの遠心的な感性は、中心的場所へと観衆の心を収斂させていくチーム・スピリットの音響空間とは、正反対の方向に向かっていく。Norryの世界は、集団に開かれるのではなく、個のなかに閉じているのだ。

では、Hughと同じ学年の男子学生Winsorの場合はどうか。ある夜、HughとWinsorは、ある寮の一室で行われたイカサマジミタポーカー・パーティーに参加する。その集まりを途中辞し、部屋から出て長いホールを横切って歩いているとき、声が聞こえてくる。⁶⁾「開いたドア」の向こうから聞こえてきた誰かの声に、Winsorが「あれは何だ?」と立ち止まり、Hughの「腕をつかむ」(taking Hugh by the arm)(154)。Hughの腕をつかむというWinsorの行動は、Hughの注意を声の方へと促し、彼を立ち止まらせようとする個人的な感情から出たものである。同じ身体接触でも、互いの腕を組み合ったり、神聖なグリップで握手するときのような儀礼的關係を意味するのではない。ヘイスティングス

の町で Hugh を Carl との形骸化した関係から切り離す方向性をもった Harry の手にも似て、Winsor の手は、惰性的な Hugh を彼岸へと導くものだといえる。

Winsor が注意を促したその声は、ルームメイトに向かって ‘marpessa’ という詩を読み聞かせる男子学生のものであると判明する (155)。⁷⁾ 詩の朗読を聞くにつれ、Hugh の腕に置かれた Winsor の手は「力が入って」(tightened) いき、Winsor も Hugh も感情に震える若者の声に反応して、ほとんど「じっと立ちすくんでいた」(155)。ここでは、感動を伝える Winsor の手に同調し、Hugh もまた、そこから一步も動けないほど聞き入っている様子が表されており。二人の心は共振していると考えられる。

共振する二人の心は、どこに向かうのか。「おお、美しい」と囁く Winsor に Hugh は、「シーッ。ここが最高の箇所なんだ」という (156)。Hugh のこの台詞は、彼の関心が、単なる声ではなく、詩の言語世界にも向けられていることを裏書する。この詩では、河の神 Evenus の娘 Marpessa が、神 Apollo と人間の男性 Idas の間で選択を迫られ、両者からの告白を聞いた後、Idas を選ぶ過程が綴られる。

1918 年出版のイギリス詩の紹介本で W. L. Phelps がこの詩を「調和した音楽」(harmonious music) に喩えるように、Idas が Marpessa に告白する場面でも、Marpessa の魅力が聴覚的に表現されている (39)。囁き (whisper)、海が「言おう」(say) と奮闘し、絶壁に「告げる」(tell) よう望んできたもの、風が「発する」(utter) ことをしてこなかったもの、「静まり返った夜」(still night) が仄めかしてきたこと… (155)。これらの音に加え、「音楽のような声」をもつ Marpessa が、「別世界」(other worlds) と結び付けられている点は、見逃せない (156)。Marpessa の音楽の魅力が別世界を想起させる、と Idas はいうのだ。Idas の聴覚的感性は、美しい音楽を聴くと別世界へと遊離していく Norry の聴覚的感性に酷似している。Hugh の関心が詩の言語世界に向けられていたこと、そして Hugh と Winsor の心が共振し合っていたことを考慮すれば、詩の朗読に傾聴する二人の心もまた、詩の語り手である Idas 同様、こことは違う別世界を向いていた、とみなすのが自然だろう。

Hugh と Winsor の心がどれほど詩の言語世界に引きずられているかは、詩を聴き終えた直後の彼らの描写にも推察することができる。詩の最後、Idas が Marpessa を抱きかかえた後、「沈黙」(silence) が落ち、「ゆっくりと」「青い夜のなか」へと「歩き去」っていく (156)。興味深いことに、この箇所を聴き終わった Hugh と Winsor は、寮のホールを「ゆっくり歩き」、「冷たい夜の空気のなかへと」出ていく (156)。しかもその間二人は「一言も」話さない (156)。まるで詩のなかの Idas と Marpessa の行為を反復するようなこの描写に、現実世界へ戻っても依然として詩の世界を彷徨う二人の心中を読み取ることは可能だろう。彼らは、美しい精神世界に心打たれる聴覚的感受性をもっており、センチメンタルな Norry と相通じるところがある、といえる。

4. 揺れ動く Hugh

これまで見てきた種々の音響空間に対し、Hugh はどう反応するのか。アメフトの決起集会に「喜びのあまりいてもたってもいられず」(agog with delight)、率先して参加する

彼は、明らかに求心性のある音響空間に惹かれている (53)。かと思えば、彼は形骸化したフラタニティの入会式にすら「感銘を受けて」(impress)いる (91)。たしかに、例の売春婦騒動と相前後してフラタニティに幻滅する彼は、以前ほど頻繁にはフラタニティ・ハウスに通わなくなる。けれども、結局は退会を思いとどまる彼の行動が物語るように、彼は腐敗したフラタニティとも、つかず離れずの関係を保ち続ける。

センチメンタルな音響空間に対してはどうか。Hughは、美しい音楽を聴くと泣けてくる、と告白するNorryに、「わかるよ、それがどういうことか」と共感を示すが、同時に、「でも君ほどじゃない。僕は泣かない」と続け、Norryの感傷主義から一步引く (135)。Winsorと立ち聞きした詩の朗読についても同様で、詩の世界にあれほど心奪われながらも、彼らは朗読を聞いている間も聞き終わった後も、開かれたドアのなかに入ろうとはしない。感動を部屋のなかの学生と分かち合おうなどとはせず、あくまで敷居の外側で美しい世界を愛でるにとどまるのだ。

小説の結末、卒業式を終え、真夜中のキャンパスを一人歩くHughの耳に、校歌を歌う数人の卒業生の声が聞こえてくる。歌声を背にフラタニティ・ハウスへと歩いていくHughの心は、この先彼を待ち受ける「素晴らしい冒険」と、後に残していく「何か美しいもの」の間で引き裂かれている (155)。つまり彼の心には、この場所から離れようとする遠心力と、この場所へと向かっていく求心力、という相反する力が同時に働いているのだ。この場面に象徴されるように、最後までHughは、センチメンタルな音響空間と男らしい音響空間を両極とする、様々な音響空間の間で振幅し続けるのだといえる。

結論

Percy Marksは、彼の著書*Plastic Age*の翌年に出版した大学論*Which Way Parnassus?* (1926)のエピグラフで、Robert Browningの“Rabbi Ben Ezra”の一節を付している。「可塑的な」、つまりどのような形にも変わりうる状態 (plastic circumstance) にある人間の魂が造物主によって形を与えられる、というイメージが表されている (n. pag.)。⁸⁾ 実際、Marksは同書の本文で、いかようにも変わりうる若者の心や行動が、入学後わずか6ヶ月も経てば当世風の「男らしさ」(virility)の「鋳型」(mold)に嵌め込まれ、他の学生と見分けがつかなくなるほど「標準化」(standardization)してしまう、と指摘する (135, 131)。

翻って、男らしい音響空間にも、形骸化した音響空間にも、はたまたセンチメンタルな音響空間にもフラフラと引き寄せられていく*The Plastic Age*のHughは、いかなる形にでもなれる代わりに、あるひとつの形に固まってしまうこともない。Marksは、様々な音響空間の間をただ揺れ動く、一見節操の無いHughの聴覚的感性を通し、どのような既成の鋳型にも収まらない、まさしく“plastic”な若者の生き方を提示したのだといえる。そうしたHughの型に嵌らない節操の無さは、アメフトの墮落以上にスキャンダラスだったのではないだろうか。

注

※本稿は、日本アメリカ文学会第52回全国大会（2013年10月12日、於明治学院大学）において「男らしいものとセンチメンタルなものの狭間で——*The Plastic Age*におけるサウンドスケープ」と題して口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。

- 1) John Kramerによると、アメリカの大学小説（college novel）とは「高等教育機関を舞台の核に据え、主要登場人物のなかに学部生、大学院生、教授陣、執行部および／もしくはその他の大学職員を含む、標準的な長さのフィクション作品」を指す（v）。大学小説の発展過程については Susan Ikenberry を参照。
- 2) この小説の何が卑猥だったのかについては、拙論「奔放な女を家庭的なフラッパーに」で考察した。そこで論じたように、この小説最大の卑猥さは、主人公ヒューのプロポーズを拒絶する女性シンシアの奔放さにある。しかし本小説を原作とする映画版は、フラッパー映画の公式にのっとり、奔放なシンシアを家庭的な女へと矯正する。結果、映画は、概ね好意的に評されることとなった（127, 136-37）。
- 3) チア・リーダーといえば、ミニスカートを履いてポンポンを振る女性の姿が思い浮かぶかもしれないが、当時は男子学生の専売特許だった。“Cheers of Spectators”の挿絵（A59）を参照。
- 4) Hugh と Carl は、フラタニティのイニシエーションの儀式の後、フラタニティへの忠誠心を共有し、「兄弟」と呼び合い、フラタニティ特有の「神聖な握手」（sacred grip）を交わす（92）。また二人は、「腕と腕を組んで」（arm in arm）、フラタニティ・ハウスに行く仲である（99）。ヘイスティングスの町を歩く際にも彼らは「腕と腕を組んで」おり、フラタニティに帰属する儀礼的な関係が持続していると考えられる。歩行の視点から *The Plastic Age* にアプローチした拙論「空想の扉の前で立ち止まる」（63-64）も参照。
- 5) 筆者は注4に前掲の拙論で、歩行の観点から Hugh と Norry の関係について論じた。そこでは、自らの空想的世界に Hugh を取り込もうとする Norry に対し、Hugh が違和感を抱いていることを明らかにした（64-65）。本稿では、音響に注目して、同じ場面をより詳細に分析している。
- 6) 筆者は注4に前掲の拙論でも、Hugh と Winsor による歩行の場面を取り上げている。そこでは、‘marpessa’の朗読に体现される美しい詩の世界に対し、一定の距離を保つ二人のスタンスを明らかにした（65）。本稿では、音響の観点から、より詳細な分析を試みている。
- 7) イギリス詩人 Stephen Phillips によって1890年に発表された詩、“Marpessa”を指す。*The Plastic Age* 出版の2年前の1922年にアメリカで出版された *The Gallienne Book of English Verse* のなかにも、この詩の一部が収録されている（504-5）。
- 8) 詩の解釈については Corson 132-33 を参照。

Works Cited

- Angell, Robert Cooley. *The Campus: A Study of Contemporary Undergraduate Life in the American University*. New York: D. Appleton, 1928.
- “Brown University’s Reward for Marks.” *Hartford Courant* 29 June 1924: C5. Hartford Courant Archives. 2 Aug. 2012 <<http://pqasb.pqarchiver.com/courant/advancedsearch.html>>.
- Camp, Walter. *Football without a Coach*. 1920. n.p. Nabu, [2010].
- Corson, Hiram. *An Introduction to the Study of Robert Browning’s Poetry*. Boston: D.C. Heath, 1886.

- “Cheers of Spectators May Not Make Sense But They Certainly Help Team Down on Field.” *Boston Daily Globe* 15 Nov. 1925: A59. Boston Globe Archive. 28 Aug. 2013
< http://pqasb.pqarchiver.com/boston/advancedsearch.html?camp=cse_static>
- Gallienne, Richard Le. *The Le Gallienne Book of English Verse*. 1922. Charleston: BiblioLife, n.d.
- Hackett, Alice Payne. *Sixty Years of Best Sellers: 1895-1955*. New York: R.R. Bowker, 1956.
- Ikenberry, Susan. “Education for Fun and Profit: Traditions of Popular College Fiction in the United States, 1875-1945.” *Imagining the Academy: Higher Education and Popular Culture*. Ed. Susan Edgerton, Cunilla Holm, Toddy Daspit, and Paul Farber. New York: Routledge, 2005. 51-66.
- Ingrassia, Brian M. *A Department of the Modern University: Discipline, Manliness, and Football in American Intellectual Culture, 1869-1929*. Diss. University of Illinois, 2008. Ann Arbor: UMI, 2009. ATT 3337801.
- Kramer, John. *The American College Novel: An Annotated Bibliography, Second Edition*. Lanham: Scarecrow, 2004.
- Lipke, Katherine. “*The Plastic Age* Breaks Record.” *Los Angeles Times* 6 Sept. 1925: 17. Los Angeles Times Archives. 1 Aug. 2012 <<http://pqasb.pqarchiver.com/latimes/advancedsearch.html>>.
- Marks, Percy. *The Plastic Age*. 1924. Charleston: Bibliobazaar, 2007.
- . *Which Way Parnassus?* New York: Harcourt, 1926.
- Phelps, W. L. *The Advance of English Poetry in the Twentieth Century*. Port Washington: Kennikat, 1918.
- Sinclair, Upton. *The Goose-Step: A Study of American Education*. Rev. ed. N.p.: Albert, 1923.
- Thompson, Emily. *The Soundscape of Modernity: Architectural Acoustics and the Culture of Listening in America, 1900-1933*. Cambridge: MIT P, 2002.
- “When Radio Answered a Call to Hollywood.” *New York Times* 10 Aug. 1930: sect.9, 12. New York Times Article Archives. 11 Aug. 2013 < <http://www.nytimes.com/ref/membercenter/nytarchive.html>>.
- 大野, 瀬津子. 「空想の扉の前で立ち止まる——『プラスチック・エイジ』における歩行——」. 『九州工業大学研究報告 (人文・社会科学)』. 第61号 (2013): 61-69.
- . 「奔放な女を家庭的なフラッパーに——映画『プラスチック・エイジ』における性表象——」. 『中・四国アメリカ研究』 第6号 (2013): 127-142.
- 諏訪部, 浩一. 「『新しい女』という他者——『プラスチック・エイジ』と『種』をめぐって」. 『多言語・多文化社会へのまなざし——新しい共生への視点と教育』. 赤司英一郎, 荻野文隆, 松岡榮志. 白帝社, 2009.